

書 評

立命館大学法学部叢書 第7号

中谷義和著 『アメリカ政治学史序説』

内 田 満

1 本書の時代的作用

アメリカ政治学は、いま1つの大きな時代的分岐点に立っている。

アメリカ政治学会は、2003年に設立100周年を迎え、またこの前後の時期に、20世紀アメリカ政治学の中心的な推進者としての役割を演じたシカゴ学派を代表する政治学者であった G. A. アーモンド、D. B. トルーマン、A. ライサーソンが相ついで没し、さらにこのシカゴ学派と近い関係にあり、1948年から20年間にわたって社会科学研究所評議会の会長として20世紀後半期のアメリカ政治学の大発展の牽引車役に任じた E. P. ヘリングは、2004年8月に100歳で生涯を閉じた。

まさしく、今日は、アメリカ政治学史上の大きな節目の時期であり、この意味で、アメリカ政治学の発達史を俯瞰し、そのアイデンティティを再確認し、今後の行方に思いを巡らすべき絶好の時機というべきであろう。

しかも、この作業は、日本の政治学にとっても、アメリカ政治学の場合に劣らない重要性をもっている。第2次大戦後の日本の政治学は、この時代に世界の政治学界において覇権的地位を享受したアメリカ政治学の圧倒的な影響下に立ってきたが、日本の政治学者は、この間にそれぞれの研究関心に従って、「手から口へ」とせわしなく断片的に切り取る形でアメリカ政治学をとり込むのに大わらわで、それぞれの概念や手法が、アメリカ政治学の発達文脈の中で占める位置について、かならずしも適切な注意を払ってきたとはいえない。この事態に照らして、アメリカ政治学の軌跡をたどり、アメリカ政治学のアイデンティティの特質を確かめることは、日本の政治学の現在位置を確認し、今後の展望を切り開く上で、疑いなく不可欠の時代的作用であろう。

この中で、わが国における数少ないアメリカ政治学史の研究者の1人として知られる著者が本書で取り組んでいるのは、ほかならぬこの時代的作用への果敢な応答

の試みであり、何よりもまず特筆されるべき本書の意義は、ここにある。

2 構成と特徴

ところで、長年にわたってアメリカ政治学の発達史を精力的に追究してきた著者は、最近10年余りの間の研究成果を軸に本書において2つの視座からアメリカ政治学像を描き出す作業を進めている。第1の視座は、アメリカ政治学の展開を時代を追って骨太に概観し、それぞれの時期の政治学の全体像を視野におさめるものであり、第2の視座は、この発達史のそれぞれの時期で中心的な役割を担った政治学者たちの知的営為を照射するものである。

第1の視座においてまず問題となるのは、アメリカ政治学史の時代区分であろう。学史研究に当たっての時代区分は、いうまでもなく研究者の問題関心や政治学の発達の文脈としての政治史、社会史などのとらえ方によって異なってくるからである。その中で、本書において著者が採用しているのは、アメリカ政治学の発達史をF. リーバーから1880年までの「草創期」、1880年代から1910年代までの「形成期」、1920年代から1945年までの「展開期」、1945年以降の「戦後期」の4期に区分し、さらに「戦後期」を1960年代を境として2区分する見方であるが、それぞれの時期における政治学の展開についての著者の論述によって裏書きされているように、まずは穏当な時代区分といつてよからう。

これらの時代区分の中で、著者が本書第 部で視野に入れているのは、「形成期」以降のアメリカ政治学である。まず、「形成期」は、著者によれば、革新主義時代を背景とし、国家学的政治学に代わって、「社会集团的・社会心理的」アプローチが台頭し、政治学の「アメリカ化」への志向性が強まり、この中で「多元主義的民主政」がアメリカ政治の目標として位置づけられる時期である。

これに対して、「展開期」は、第1次大戦後から第2次大戦の終結に至るまでの時期で、女性参政権の制度化を1つのテコとした大衆民主政の発展の文脈で、アメリカ政治学は、さらに顕著な展開をみせ、世界の政治学界での存在感を一段と高めた。そして、この時期の代表的先導者は、ほかならぬC. E. メリアムであり、「政治学の科学化」を標榜し、後に「シカゴ学派」として知られることになる「行動論政治学」の担い手たちをその門下から輩出させることになる。

次の「戦後期」の1960年代末までの時期のアメリカ政治学をリードしたのが、この「シカゴ学派」であり、行動論政治学が「花盛り」を謳歌する中で、H. D. ラスウェル、V. O. キイ、C. H. プリチェット、D. B. トルーマン、G. A. アーモンドらの

メリアム門下が、相ついでアメリカ政治学会会長に就任した。

この戦後期の前期と1960年代以降の時代とをまたぐ時期に挑戦的な役割を演じたのが、R. A. ダールや D. イーストンであり、1953年に『政治体系』を著わし、「入力 - 転換 - 出力 - フィードバック」という均衡モデルを軸とする体系理論の構想を提示して、一躍行動論政治学の旗手としての地位を占めることになったイーストンは、その16年後の1969年のアメリカ政治学会年次大会での会長講演で、この行動論政治学をも含む現代アメリカ政治学のレリバンシーを問い、「脱行動論革命」の時代的意義を論じることになる。

そして、このような問題提起を背景に、1970年代以降のアメリカ政治学において百家争鳴的に提起されてきたのが、新国家論、新制度論、合理的選択論などであった。

このようなアメリカ政治学の発達史の概観の後で、著者は、第 部で第2の視座としてそれぞれの時期を代表する政治学者として5人を選び、それぞれの政治学の世界の構図を解明し、その特質を明らかにしている。

ちなみに、ここで俎上に載せているのは、「形成期」に「集団理論の地平を切り拓いた」A. F. ベントレー、「展開期」に「新しい政治学」の方向指示者としての役割を演じ、後に「現代政治学の父」の呼称を享受することになったメリアム、その際立った多才と独創性によってシカゴ学派のシンボリック的存在としての地位を占め、「戦後期」の前期に「シンボルとコミュニケーション研究」「政治行動の精神分析的アプローチ」「政治概念の体系化」「政治学の政策科学化」など多方面にわたって先導者役を演じた H. D. ラスウェルと、「戦後期」の1950年代以降、アメリカ政治学の転換手の役割を担い続けたダールとイーストンである。

これらの5人の政治学者をアメリカ政治学史上の巨人としてだけでなく、20世紀の世界の政治学を代表する存在と目することに、およそ異論はあるまい。

このような構成から成り立っている本書の第1の特徴は、すでに明らかなように、著者の多年にわたる研究の基礎の上に立って、程よい遠近感覚に導かれていることである。しかも、歴史的概観とそれぞれの時期を代表する政治学者の業績の解説とを交差させることによってアメリカ政治学史をいわば立体的に描き出すという企ては、アメリカ政治学の輪郭をいっそう明確にとらえるのに資するところが、きわめて大きい。

第2の特徴は、第 部で検討の対象として5人の「理論家たち」には、それぞれ略伝を付するなど著者の周到な配慮が、緊張感に溢れた筆致とあいまって、本書をアメリカ政治学、ひいては20世紀政治学への好個の道案内としていることである。

そして第3の特徴は、本書が、著者の長年の研究蓄積の結果として関係文献の丹念な渉獵の上に成り立っていることで、詳細な注として提供されている情報は、後に続く研究者にとって貴重な研究案内として裨益するところ大であろう。

3 2つの含意

さらに、本書から読みとるべき含意として重要なのは、2つの点であろう。1つは、「政治学とは何か」の問い直しである。

2002年8月にポストンで開かれたアメリカ政治学会年次大会で、R. D. パットナムは、「政治学の公的役割」と題する会長講演を行い、政治学は、公的な場での存在感をもっと高める必要があるとし、政治学のあり方の見直しを提起した。いうまでもなく、この問いは、かつてメリアムが提起し、1969年のアメリカ政治学会年次大会での会長講演でイーストンが改めて投げかけた問いであったのであり、本書が描き出しているのは、まさしくアメリカ政治学のこの問いとの取り組みの軌跡にほかならない。

結局、アメリカ政治学の1つの大きな分岐点に立つ今日、本書の含意としてわれわれが読みとるべきは、政治学者にとっての喫緊の課題が、19世紀末以来のアメリカ政治学の「時代との対話」の記録と向き合い、政治学のあり方に目を凝らすことにあるということである。

この含意と関連して、われわれが読みとるべき本書のもう1つの含意は、日本政治学史編纂の企てへの問題提起である。

わが国の政治学の歴史は、本書が検討の主題としているアメリカ政治学の「形成期」以降と重なるが、わが国のこの政治学の軌跡をたどる通史は、未だに存在しない。日本政治学史研究の草分け的著作『日本における近代政治学の発達』（1949年）において、蠟山政道は、「過去1世紀の長い間、たとえ今日今後とは異なった環境ではあったにせよ、やはり多くの影響を諸外国から受けて来た日本であり、日本人であったのであり、その結果として生じた歴史的事実を顧ることは、今後の再建問題にとって理由あることといわねばならぬ」と論じているが、それから半世紀余りを経た現在、蠟山の問題提起は、いまなお今日性を失っていない。

本書が、日本政治学の通史編纂の企てへの引き金として作用することが、評者のひそかな期待である。